

調査研究報告

土浦市后塚古墳の発掘調査 —2018・2019年度調査の概要—

滝沢 誠・山下 優介・荒井 啓汰
大村 陸・大沼 柊平・浅野 孝利

I. 調査の経緯

茨城県南部に広がる霞ヶ浦（西浦）には、出島半島を挟んで北西方向にのびる二つの大きな入江がある。そのうち、現在の土浦市に向かつてのびる南側の入江を「土浦入り」と呼んでいる。今回発掘調査を実施した后塚古墳は、その土浦入りの最奥部にあたる湖岸台地の縁辺部に立地し、同じ台地上の南東約100mには、霞ヶ浦沿岸で有数の墳丘規模を誇る王塚古墳（前方後円墳・墳丘長約87m）が存在する。

后塚古墳では、1985年に茨城大学考古学研究室による測量調査がおこなわれ、墳丘長65mの前方後円墳であるとの認識が示されている（茂木・水野・長洲1991）。また、王塚古墳については、以前から前期古墳に特徴的な「柄鏡型」の墳丘形態をもつ前方後円墳であることが知られている（土浦市史編さん委員会編1975）。これらの点をふまえ、常陸南部地域を対象とした従来の古墳研究では、土浦入り最奥部における古墳時代前期の首長墳としてまず后塚古墳が築かれ、次いで王塚古墳が築かれたとの見方が有力である（日高1998など）。

これまでの研究成果が示すように、后塚古墳と王塚古墳は古墳時代前期に築かれた土浦入り沿岸の首長墳である可能性が高いと思われる。また、土浦入りの最奥部という水上交通の要衝に墳丘形態を異にする2基が連続して築かれたとみられる点は、霞ヶ浦沿岸における古墳時代有力集団の存立基盤や形成過程を考えるうえで重要である。しかしながら、これまでに両古墳にかかわる出土遺物は一切知られておらず、築造年代の推定は専ら墳丘形態の特徴を手がかりとしてきたという問題がある。また、それらの墳丘形態を示す測量図についても、今日的水準からみた精度や測量範囲の点で改善の余地が残されている。

霞ヶ浦沿岸には、前期古墳とみられる大型古墳の存在が少なからず知られているものの、じつところ、その実態が詳しく把握されている事例は意外と少ない。上記のように、后塚古墳と王塚古墳についても考古学的情報の不足は否めず、さらなる実態把握を進めようとするならば、より詳細な測量調査や墳丘本来の形態・規模及び出土遺物の確認を目的とした発掘調査を進めていく必要がある。

以上の現状認識にもとづき、筑波大学考古学研究室では、2015年に王塚古墳の測量調査、2016年に后塚古墳の測量調査を実施した（滝沢2017、石田ほか2018）。その後、さらなる調査

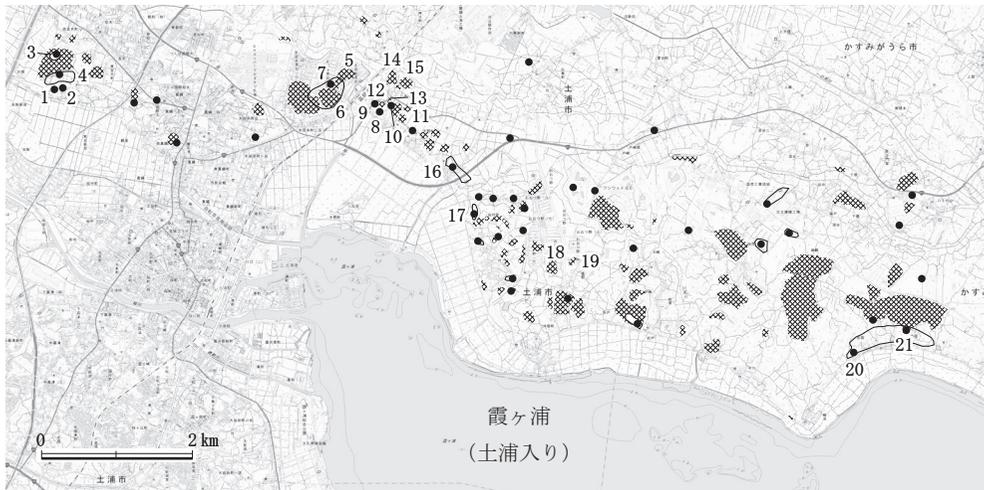
の必要性について土浦市教育委員会と協議を重ね、その結果、2018年度から4ケ年計画で両古墳の実態解明を目的とした発掘調査を実施することとなった。この一連の調査では、土浦市教育委員会が調査主体となり、筑波大学の滝沢 誠が調査担当者として全体を統括した。また、各年度の調査は、筑波大学の正規授業である考古学実習として実施し、筑波大学の学生が参加したほか、東京大学、東海大学、川村学園女子大学の学生も部分的に参加した。

今回の報告は、2018年12月3日～22日及び2019年12月2日～25日の2次にわたって実施した後塚古墳の発掘調査について、その概要をまとめたものである。最終的な報告は、王塚古墳の発掘調査成果とあわせて後日公開する予定であり、ここでは当面の成果と課題を整理することに努めたい。
(滝沢 誠)

II. 立地と環境

后塚古墳は茨城県土浦市手野町に所在する(第1図9)。新治台地に入り込む2つの谷によって形成された約200mの扇状の小台地があり、その台地の縁辺部に位置する。台地上の標高は22～25m、低地部との比高差は16～19mである。后塚古墳の南東約100mの地点には、土浦市内最大の前方後円墳である王塚古墳(同図8)が所在する(滝沢2017)。いずれも古墳時代前期と想定され、前方後円墳と前方後方墳が至近距離に築造されるという状況が注目される。なお、同古墳の周辺には薬王寺の墓地があり、后塚古墳の墳丘東側には墓地と薬王寺の仏堂をつなぐ道が確認できる。そのため、墳丘東側はこれらの道や墓地によって改変を受けている。

后塚古墳周辺における古墳時代の集落遺跡としては、后塚古墳の東側に姫塚遺跡(同図12)、



1:常名瓢箪塚古墳 2:常名天神塚古墳 3:北西原遺跡 4:山川古墳群 5:宝積遺跡 6:東台遺跡 7:東台古墳群
8:王塚古墳 9:后塚古墳 10:ドンドン塚古墳 11:馬坂古墳 12:姫塚遺跡 13:手野宮脇遺跡 14:五斗落遺跡
15:大儘遺跡 16:下郷古墳群 17:田村舟塚古墳群 18:八幡脇遺跡 19:尻替遺跡 20:田宿天神塚古墳 21:赤塚古墳
(網掛けは集落遺跡、黒丸及び黒枠は古墳・古墳群を示す。)

第1図 周辺の古墳時代遺跡

その北東側に手野宮脇遺跡（同図 13）が存在する。採集された土器から古墳時代前期の集落であると思われ、王塚古墳・后塚古墳との関係が予想される（茂木ほか 1984）。また、五斗落遺跡（同図 14）では発掘調査がおこなわれ、古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されている（柴・中根 1987）。

より巨視的にみると、新治台地の縁辺部に前期古墳が集落遺跡を伴って所在していることがうかがえる。常名瓢箪塚古墳（同図 1）と常名天神山古墳（同図 2）はいずれも前方後円墳であり、その北側には集落遺跡である北西原遺跡（同図 3）が存在する。このように土浦入り北岸一帯においては、前期古墳とその造営主体となる集落が対応する状況が看取される（滝沢 2017）。

（荒井啓汰）

Ⅲ. 調査成果

1. 調査の概要（第 2 図）

2016 年におこなった測量調査の成果（石田ほか 2018）をもとに、発掘調査を実施した。発掘調査は 2018 年と 2019 年にわたって、筑波大学の考古学実習としておこなった。2018 年には、墳丘の全長を確定する目的で、後方部北側に第 1 トレンチを、前方部前端に第 2 トレンチを設定した。また同時に、墳丘の形状を確認するため、西側くびれ部に第 3 トレンチを設定した。2019 年には、詳細な墳丘形状を確定するため、後方部北西隅に第 5 トレンチを、前方部東側に第 6 トレンチを設定し、発掘調査をおこなった。また、埋葬施設の範囲確認を目的として、墳頂部に第 4 トレンチを設けた。

（荒井啓汰）

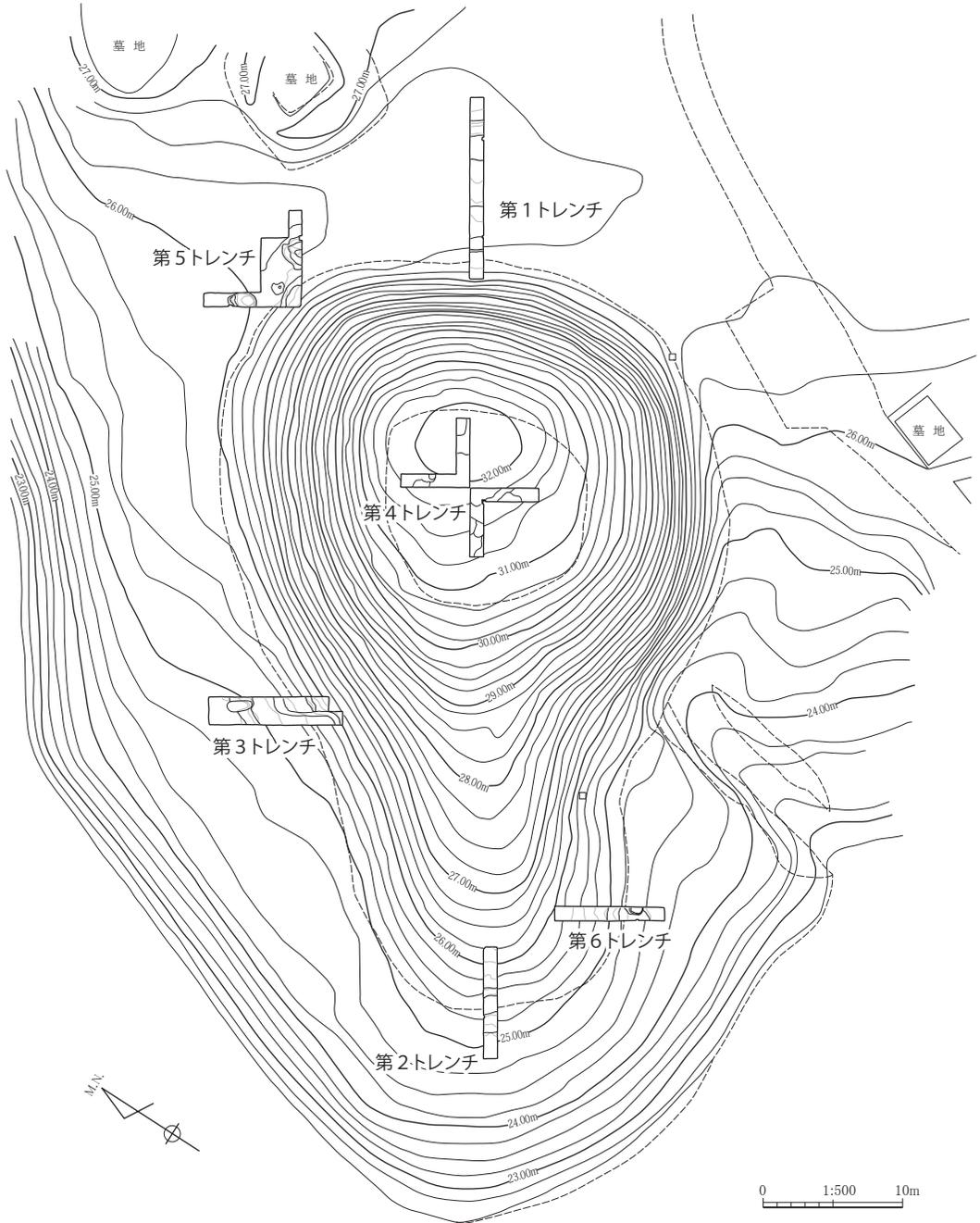
2. 後方部の調査

(1) 第 1 トレンチ（第 3 図）

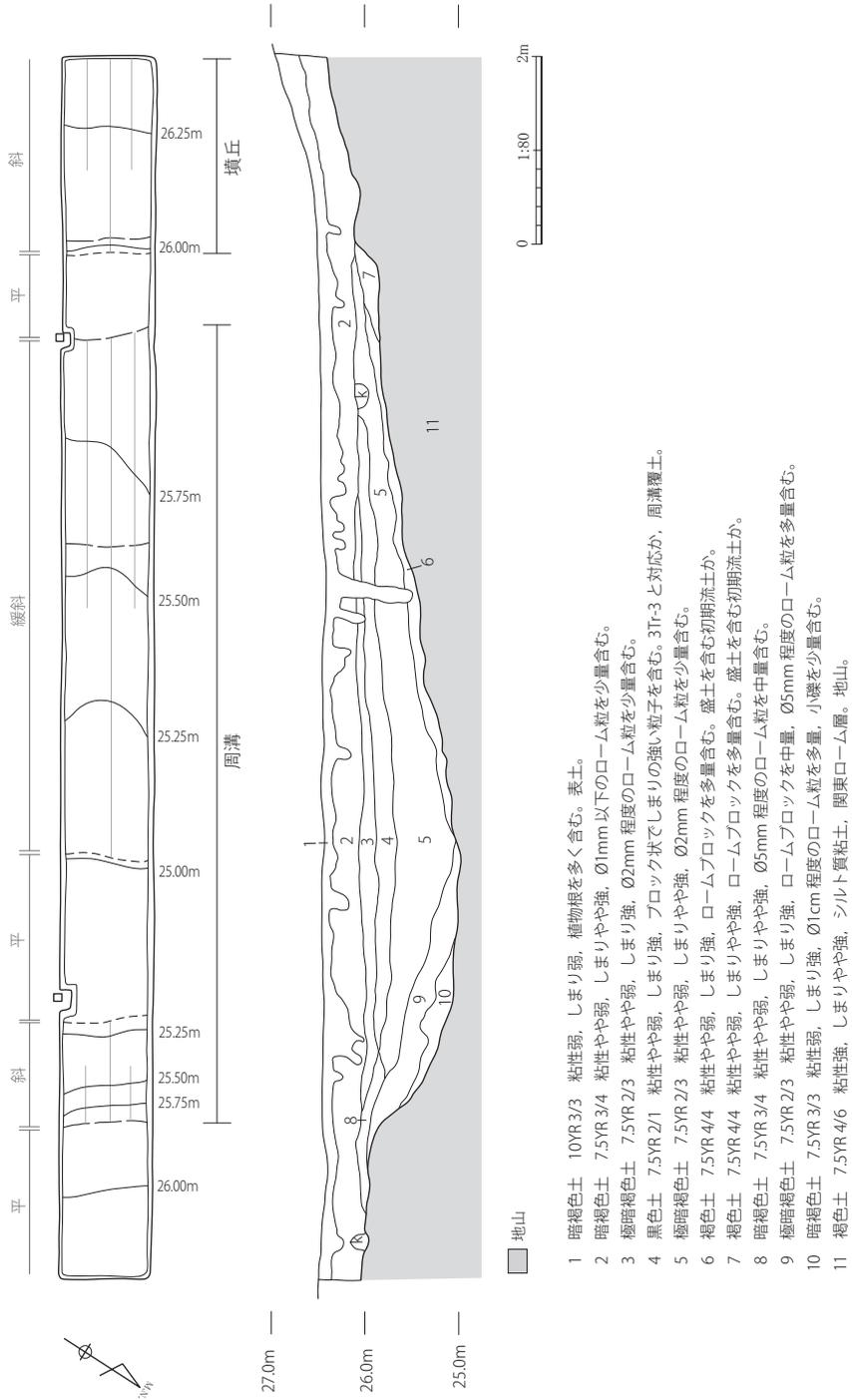
後方部後端の確認を目的とし、墳丘北側の主軸上に幅 1.0 m、長さ 13.0 m のトレンチを設定した。その結果、トレンチ中央部において幅 8.4 m、確認面からの深さ 0.9 m の逆台形を呈する周溝が検出された。

表土から 40 cm ほどの深さまでは後世の削平を受けているが、標高 26.0 m よりも下の範囲では、その堆積状況から後世の改変は認められない。第 5・6 層にはローム粒を多量に含み、初期流土として認識できる。

トレンチ南端から 2.1 m までは、墳丘の範囲と判断される。その大部分は削平を受けているものの、南端から 2.1 m の位置には墳端と判断される落ち込みが確認された。この落ち込みは高さ 24 cm ほどであるが明瞭な段をもち、トレンチの範囲内では東西方向に直線的にのびる。落ち込み上面までは後世の削平を受けているが、この段差部分に三角堆積がみられることから墳丘構築当時の状態を保存していると考えられる。地山を削り出して形成した墳端の一部であると言える。その墳端の北側では、幅の狭い平坦面がみられた。平坦面の幅は 0.9 m で、その北側は周溝の緩傾斜となる。



第2図 トレンチ配置図



第3図 第1トレンチ

トレンチ南端から 3.0 m ～ 11.4 m の範囲では周溝が確認された。周溝断面は非対称な逆台形を呈する。周溝の傾斜は南側では緩やかで、北側では急に立ち上がる。周溝底面はトレンチ北寄りに認められ、その幅は 1.9 m である。周溝上端の標高は南側で 25.96 m、北側で 25.80 m、周溝底面の標高は 25.00 m であり、その比高差は 0.9 m ほどである。

古墳時代の遺物として、周溝覆土から土師器壺（第 11 図 1）や台付甕の脚台部（同 2）などが出土している。特に、土師器壺（同 1）はトレンチの南側、周溝覆土の極暗褐色土層（第 3 図 5 層）中からまとまって検出されている。その検出状況から、墳頂部などに配置されていた土師器壺が、ある段階で周溝内に転落したものと判断される。（荒井啓汰）

(2) 第 5 トレンチ（第 4 図）

墳丘形状を正確に捉えるために墳端を確認すること、および第 1 トレンチで確認された周溝が西側へどのように続くのかを確認することを目的として、墳丘の北西に第 5 トレンチを設定した。当初、第 5 トレンチは、幅 1.0 m、長さ 5.0 m のトレンチを 2 本 L 字型になるように設定し、北側を A 区、西側を B 区とした。その後それぞれの同軸方向に 2.0 m 拡張した。さらに、トレンチ南東隅の付近において、地山の高まりが検出されたため、L 字トレンチの内側（北西側）を 4.0 × 2.0 m の範囲で拡張し、C 区を設定した。

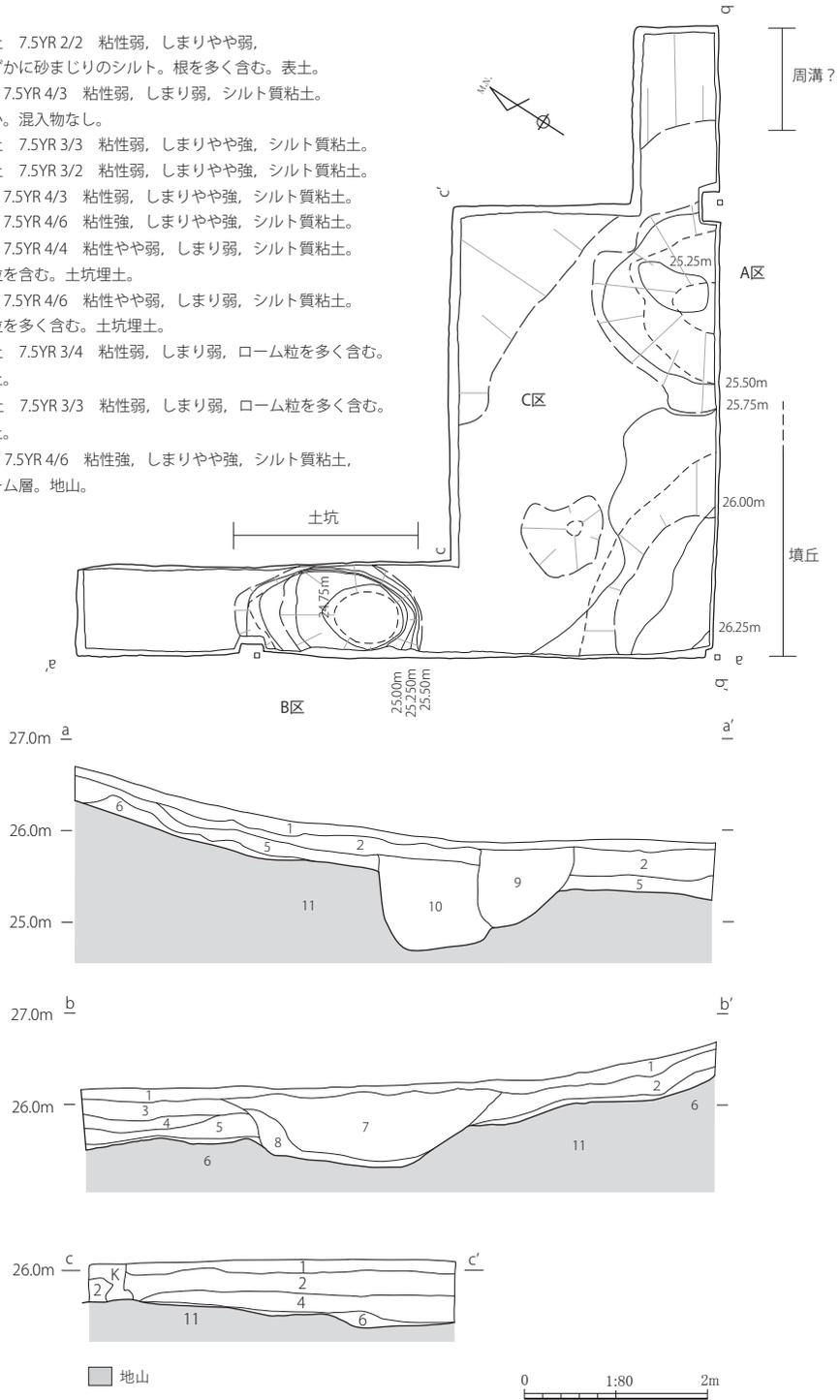
調査の結果、トレンチ南東隅において、地山の高まりが検出された。トレンチ南東隅から北に 2.2 m、西に 1.5 m ほどの範囲で緩やかな斜面が認められる。地山面の標高は、トレンチ南東隅で標高 26.25 m、北に 2.2 m 地点で標高 25.79 m であり、その比高差は 46 cm 程度である。この地山面が墳丘構築当時の面を留めているとは限らないが、全体的な位置関係をふまえると、このトレンチ南東部の高まりは墳丘の一部、つまり後方部北西隅の残丘であると考えられる。

周溝について、A 区ではトレンチ北端方向への全体的な傾斜が認められた。また、A 区西壁および C 区東壁には黒褐色土層が確認でき（第 4 図 4 層）、これは第 1 トレンチの周溝覆土として確認された層と同一である。このことから、第 5 トレンチでは、この黒褐色土層がみられることを根拠とし、明瞭ではないものの全体的に北側に傾斜している部分を、ごく浅い周溝の一部と捉えることができる。

また、A 区には最大径 2 m ほどの土坑が確認され、後世に掘り込まれたものと思われる。B 区では東端から西端方向へむけ、前述した高まりを含む緩斜面が存在するが、途中 3.2 m の地点で地山が急激に落ち込み、最大径 2.1 m、最深部は地表面から 1 m 以上の土坑が確認された。掘り込み中から遺物は検出できなかったものの、先述の傾斜面を掘り込んでおり、古墳造営より後の時期につくられたと考えられる。なお、本トレンチでは、4 点の土器片と 3 点の陶器片が出土したが、古墳に伴う遺物は確認できなかった。（大沼柊平）

土浦市后塚古墳の発掘調査

- 1 黒褐色土 7.5YR 2/2 粘性弱, しまりやや弱, ごくわずかに砂まじりのシルト。根を多く含む。表土。
- 2 褐色土 7.5YR 4/3 粘性弱, しまり弱, シルト質粘土。根が多い。混入物なし。
- 3 暗褐色土 7.5YR 3/3 粘性弱, しまりやや強, シルト質粘土。
- 4 黒褐色土 7.5YR 3/2 粘性弱, しまりやや強, シルト質粘土。
- 5 褐色土 7.5YR 4/3 粘性弱, しまりやや強, シルト質粘土。
- 6 褐色土 7.5YR 4/6 粘性強, しまりやや強, シルト質粘土。
- 7 褐色土 7.5YR 4/4 粘性やや弱, しまり弱, シルト質粘土。ローム粒を含む。土坑埋土。
- 8 褐色土 7.5YR 4/6 粘性やや弱, しまり弱, シルト質粘土。ローム粒を多く含む。土坑埋土。
- 9 暗褐色土 7.5YR 3/4 粘性弱, しまり弱, ローム粒を多く含む。土坑埋土。
- 10 暗褐色土 7.5YR 3/3 粘性弱, しまり弱, ローム粒を多く含む。土坑埋土。
- 11 褐色土 7.5YR 4/6 粘性強, しまりやや強, シルト質粘土, 関東ローム層。地山。



第4図 第5トレンチ

3. 前方部の調査

(1) 第2トレンチ (第5図)

前方部前端の確認を目的として、前方部南側の主軸上に幅 1.0 m、長さ 8.0 m のトレンチを設定した。全体的には南側に向かって傾斜する地山が確認された。地山上には墳丘の崩落土が流入し堆積していた。地山までの深さはトレンチ北端で 20 cm、南端で 95 cm を測る。トレンチ北端から 3.5 m の地点までは全体的に緩傾斜が認められるが、トレンチ北端から 3.5 ~ 4.7 m のあいだは 1.2 m ほどの平坦面が確認された。平坦面の南側には再び斜面がみられるが、トレンチ北端から 6.1 m の地点よりも南側は平坦になる。全体的な傾斜が終了する傾斜変換線の標高は 24.25 m である。

全体的に墳丘構築時の地山面の遺存状況は良好でなく、墳端の痕跡等も明瞭でない。墳丘斜面にあたるトレンチ北半部は傾斜角度が非常に緩やかであり、その覆土 (第5図2層) の様相からも構築当時の傾斜を留めているとは言い難い。

このように、前方部前端は後世の削平や崩落の影響により墳端の位置を捉えにくいいため、それらの決定には周囲の状況や周辺のトレンチの様相を参考にするほかない。前方部側面にあたる第6トレンチでは、墳端は標高 24.20 m 付近に認められるため、第2トレンチにおいても同様の高さに墳端が位置すると予想される。それをふまえると、全体的な傾斜が終了するトレンチ南端付近の傾斜変換線 (標高 24.25 m) が墳端として想定される。第2トレンチの様相からは確実なことが言えないが、現状ではトレンチ北端から 6.1 m までの範囲を前方部の墳丘と認識したい。

(荒井啓汰)

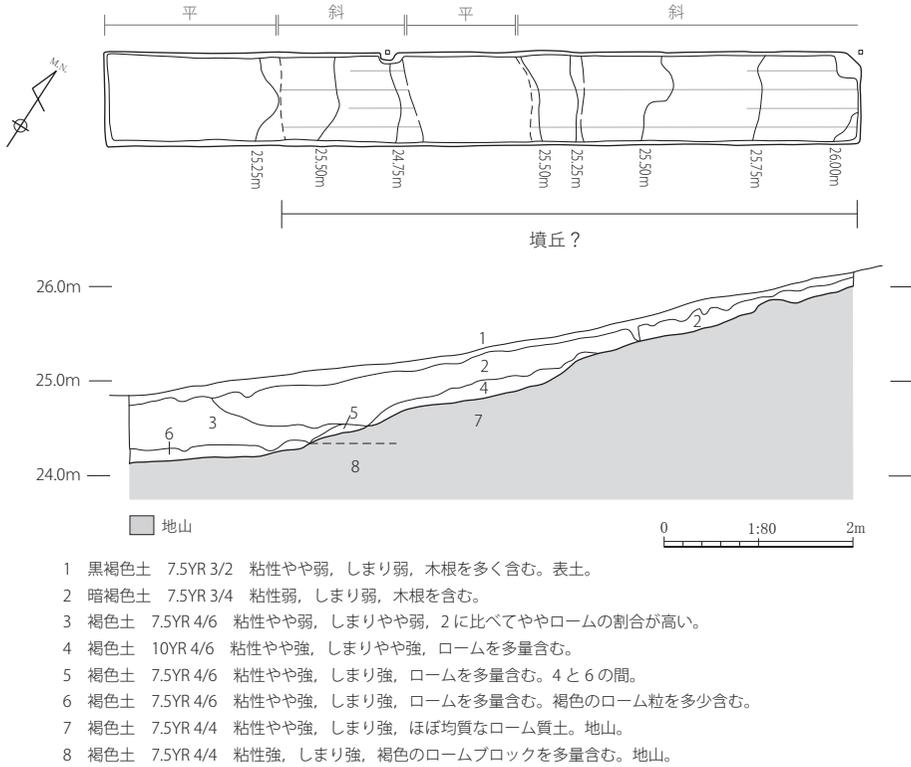
(2) 第3トレンチ (第6図)

くびれ部の検出と墳形の確認を目的とし、墳丘西側の斜面に、幅 1.0 m、長さ 9.5 m のトレンチを設定した。トレンチは墳丘の主軸と直交する軸線に沿い、主軸からトレンチ西端までの距離は 19.5 m である。調査が進むなかで、トレンチ東端において墳丘構築面と判断した褐色土 (地山) がトレンチ北西側へと続く様子を確認した。そのため、当初設定したトレンチの西端から 8.5 m の範囲については、トレンチの幅を北側に 1 m 拡張し、より詳細な墳丘構造の把握を目指した。

トレンチ西端から 3.2 m 付近を境に、東側では表土の下から地山削り出しによる墳丘構築面が認められ、西側では黒色土の堆積が確認された。構築面までの堆積は、浅いところで約 30 cm、深いところで約 60 cm であった。トレンチ北東部の墳丘構築面には、段状の高まりが若干認められた。トレンチ南半側は、構築面が東端から約 1.0 m の範囲でやや急に落ち込むのに対して、拡張した北半側では、東端から 4 m 付近まで傾斜を伴って緩やかにのびた後に落ち込む様子が観察された。

トレンチ西側の落ち込みは、後述のように一部平安時代の土坑が掘り込まれているものの、全体的にはトレンチ西端から 3.5 m 付近でトレンチに斜交する落ち込みとして検出された。そ

土浦市后塚古墳の発掘調査

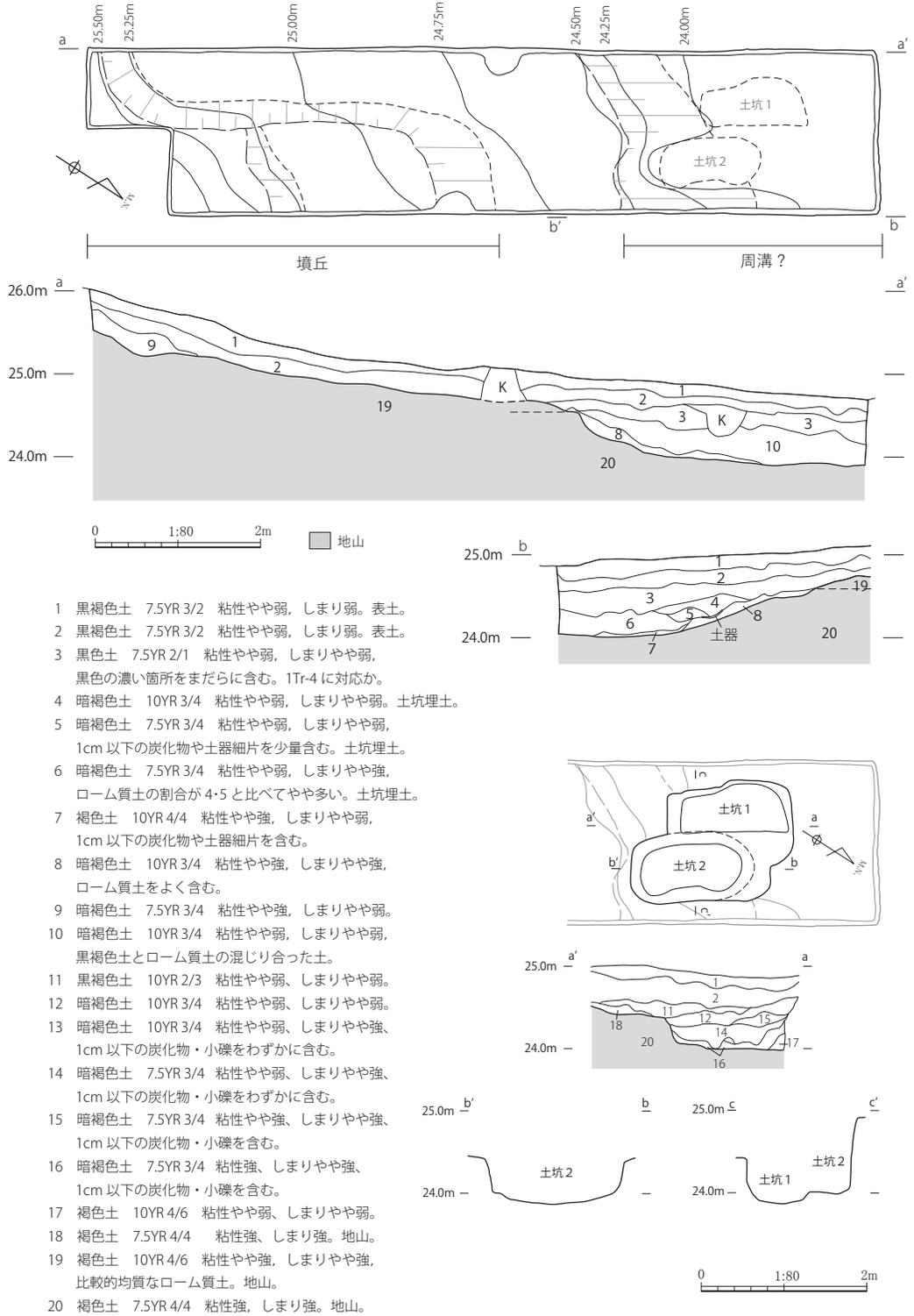


第5図 第2トレンチ

れに対応する落ち込みの底も土坑の影響を受けていたが、概ね西端から2m付近で上端と同様の方向に検出された。落ち込みの底面は平坦となり、トレンチのさらに西側へと続くことが推定された。この落ち込みの上端付近に堆積していた覆土中より、底部に穿孔をもつ壺形土器の破片（第11図4）が出土した。以上の点をふまえると、本トレンチでは後方部の南西隅付近を検出したと考えられる。トレンチ西側で確認された落ち込みの性格については、周溝の可能性も想定されるが、第2・5トレンチの様相をふまえると、墳丘西側に明確な周溝がめぐっていたかどうか判断が難しい。

落ち込み付近で検出した土坑は、長軸約1.5m、短軸約0.6mの方形に近い形状の土坑1と、長軸約1.7m、短軸約0.8mの隅丸方形の土坑2が重複して検出された。土坑2に対して土坑1が切り込む。土坑1の床面近くからは土師器片が出土し、土坑2の床面直上からは土師器の高台（第12図7）が出土した。そのほかに、この土坑に関連すると考えられる遺物として、トレンチ西端付近から高台付坏（同6）、北壁付近から須恵器坏の底部（同5）などが出土した。

（山下優介）

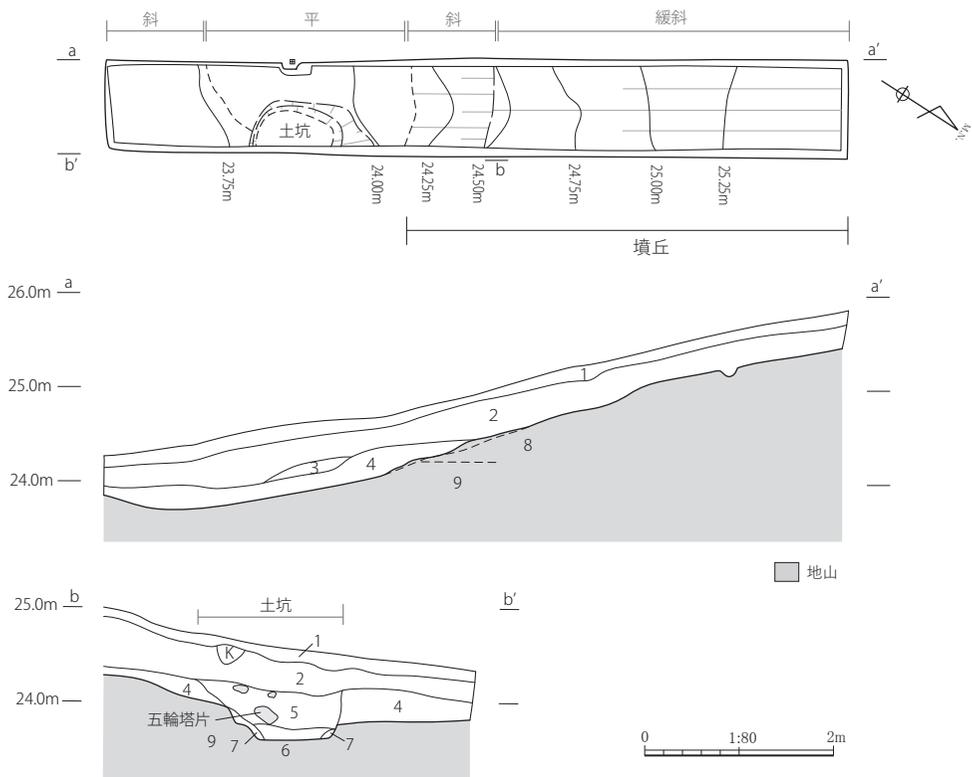


第6図 第3トレンチ

(3) 第6トレンチ (第7図)

前方部東側の墳端を検出することを目的として、墳丘主軸に直交するかたちで東西 6.0 m、南北 1.0 m の第6トレンチを設定した。最終的に東側へ 2.0 m 拡張し、あわせて東西 8.0 m、南北 1.0 m の範囲を掘削した。

調査の結果、墳丘主軸側であるトレンチ西端では地表から 40 cm ほど掘削した標高 25.45 m 付近で地山とみられる褐色土が検出された。地山は東側に向かって緩やかに下降し、トレンチ西端より東へ 3.7 m から 4.5 m 地点まで傾斜角を大きくして落ち込む様子が確認された。4.5 m 地点からは再び傾斜を緩やかにしながら東へ下降し、6.8 m 付近で完全に平坦面に移行した。



- 1 暗褐色土 7.5YR 3/4 粘性弱、しまり弱、植物根が多く混じる。表土。
- 2 暗褐色土 10YR 3/4 粘性弱、しまりやや弱、五輪塔破片を少量含む。
- 3 暗褐色土 10YR 3/4 粘性弱、しまりやや強。
- 4 暗褐色土 7.5YR 3/4 粘性弱、しまりやや強。
- 5 褐色土 7.5YR 4/4 粘性弱、しまりやや弱、地山ブロック少量、五輪塔破片。土坑埋土で人為的な埋土。
- 6 褐色土 7.5YR 4/4 粘性弱、しまりやや弱、地山ブロック多量。土坑埋土で人為的な埋土。
- 7 暗褐色土 7.5YR 3/4 粘性弱、しまりやや強。土坑壁崩落土、4層由来。
- 8 褐色土 7.5YR 4/6 粘性やや弱、しまりやや強。地山。
- 9 暗褐色土 10YR 3/4 粘性やや弱、しまりやや強、にぶい橙色の砂質土ブロックを多量含む。地山。

第7図 第6トレンチ

トレンチ西端より 3.7 m から 4.5 m 地点までが墳丘本来の傾斜であり、これより上部は後世の改変を受けていると判断される。また、この傾斜が緩やかになる 4.5 m 地点が墳端とみられる。

トレンチ西端より 5.2 m 付近から 6.4 m 付近にかけて、土坑が確認された。本土坑の深さは地山面より 20～30 cm 程度であるが、断面の堆積状況を観察したところ、本来の深さは 50 cm 程度であることが確認された。土層断面の観察により、土坑が 4 層の上面を掘り込んでいる様子が確認されたこと、土坑埋土に地山のブロックが含まれる様子が確認されたことから、本土坑は人為的に埋められたものであるとみられる。土坑内からは五輪塔の破片が数点確認された。

本トレンチからは五輪塔片 7 点、瓦片 6 点、土器片 20 点が出土したが、古墳時代に属する遺物は認められない。五輪塔片に関しては、トレンチ西端より 1.0～2.0 m 付近でまとまって出土している。
(浅野孝利)

4. 墳頂部の調査

(1) 第 4 トレンチ (第 8・9 図)

埋葬施設の位置と範囲の確認を目的として、後方部墳頂に主軸と平行・直交する十字方向のトレンチを設定した。十字トレンチの中心を測量基準点から北に 1.0 m、西に 1.0 m の地点においた。ここから各方向に長さ 5.0 m、幅 1.0 m のトレンチを設定し、北側から反時計回りに A～D トレンチとした。なお、東西方向の B・D トレンチについては、南北方向と重なる 1.0 m 四方を除いた、長さ 4.0 m、幅 1.0 m の部分を指すこととした。

調査の結果、後方部墳頂の中央部に南北 6.0 m、東西 6.6 m の範囲で標高 31.30～31.60 m 付近にロームブロックを含む盛土が面的に確認され、部分的に塊状の粘土ブロックが検出された。また、この盛土南端部からは L 字状に巡る砂混じりの層が確認され、この盛土・粘土・砂が埋葬施設に関連する可能性が考えられるが、埋葬施設の種類や構造を明確に示すような遺構は確認されなかった。

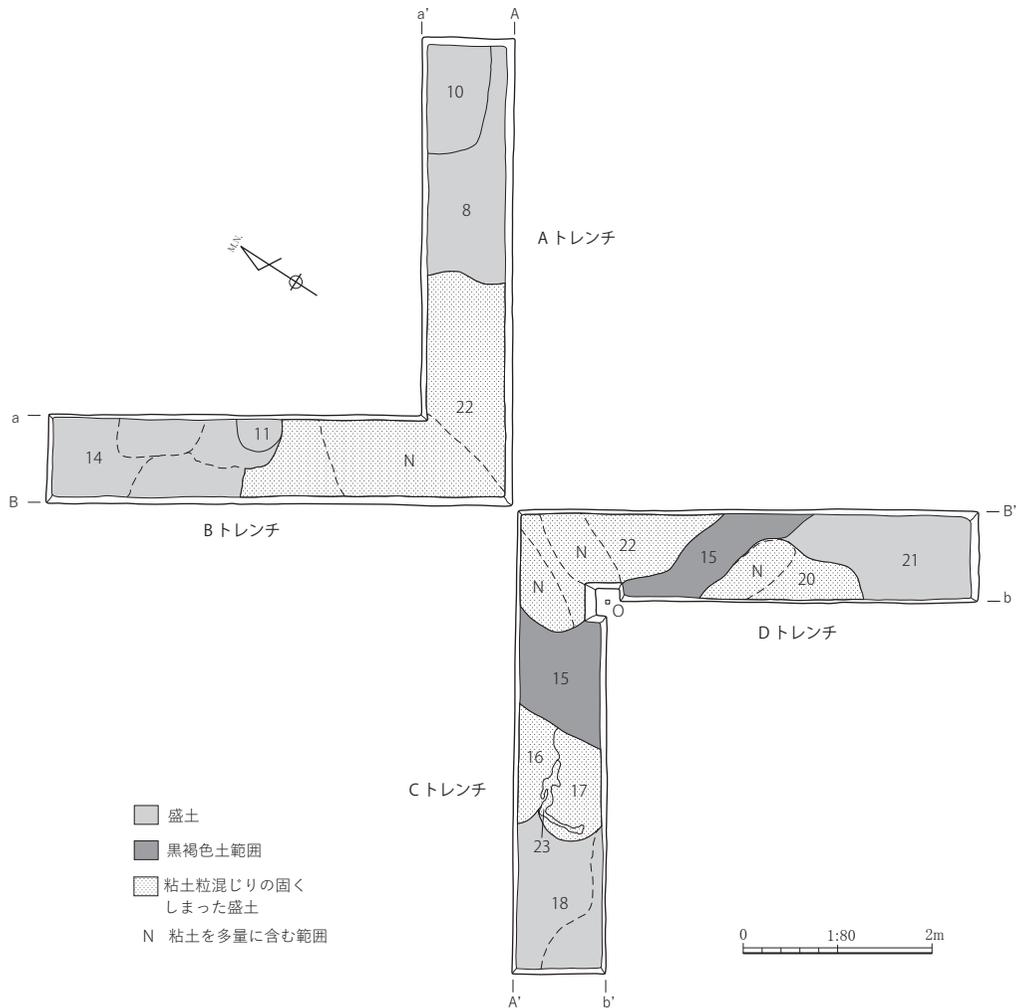
表土直下の様相について、C トレンチ南端部付近の標高 31.10 m ほどから寛永通宝 1 点が出土しているが、これは A～D トレンチで広く認められる第 9 図 7 層にあたり、7 層は後世の改変を受けていると考えられる。ただし、この層が認められない B トレンチ西端部では表土直下に盛土がみられ、また 7 層以下ではしまりが強くロームブロックを含むような盛土が広く確認されたことから、下部層ではおおそ墳丘構築当時の層が残されていることが明らかとなった。

この盛土を切り込むように黒褐色土を含む層があり、標高 31.20～31.70 m の範囲で確認された (第 9 図 15 層)。この黒褐色土は他の盛土に認められないため、盛土構築後に形成された異なる性格をもつものと考えられる。平面的に C・D トレンチで横断的に検出され、このうち C トレンチでは屈曲部が認められることから、トレンチ外部にも方形状に続く可能性があるが、A・B トレンチで同一の層はみられなかった。

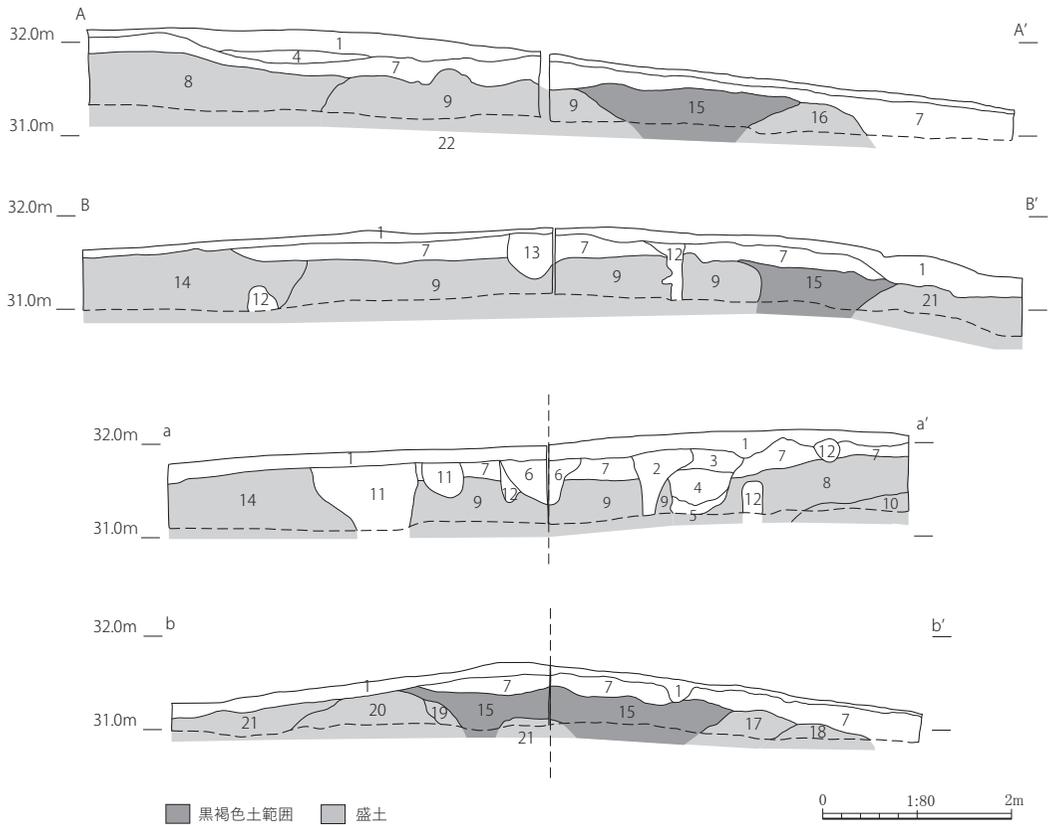
A～D トレンチ中央部では標高 31.30～31.60 m 付近にしまりの強い粘土ブロックを含む盛土が確認された (第 8 図 20・22 層)。この範囲は南北 4.5 m、東西 3.5 m で、その範囲の軸は墳

丘主軸から西に約45度傾いている。粘土が強く混じり、その範囲が長方形を呈することから、埋葬施設に関わる可能性がある。なお、中央部で広がる盛土の南端部では、ロームブロックを含むかどうかで分層した2つの盛土に挟まるようにして、L字状の平面をもつ砂混じりの層が確認された（第8図23層）。

また、A・Bトレンチでは表土直下から盛土を掘り込んだ土坑が検出された。Aトレンチ中央部の土坑（第9図3・4・5層）では標高31.60～31.70m付近から高坏の坏部（第11図5）や脚部（6～8）などが集中的に出土し、Bトレンチ東端部の土坑（第9図6層）では標高31.50m付近から小型器台2個体分の脚部（第11図9～10）が一括で出土したが、いずれも土坑覆土中から出土したため、原位置を保ったものではないと判断した。これらを含め、第4ト

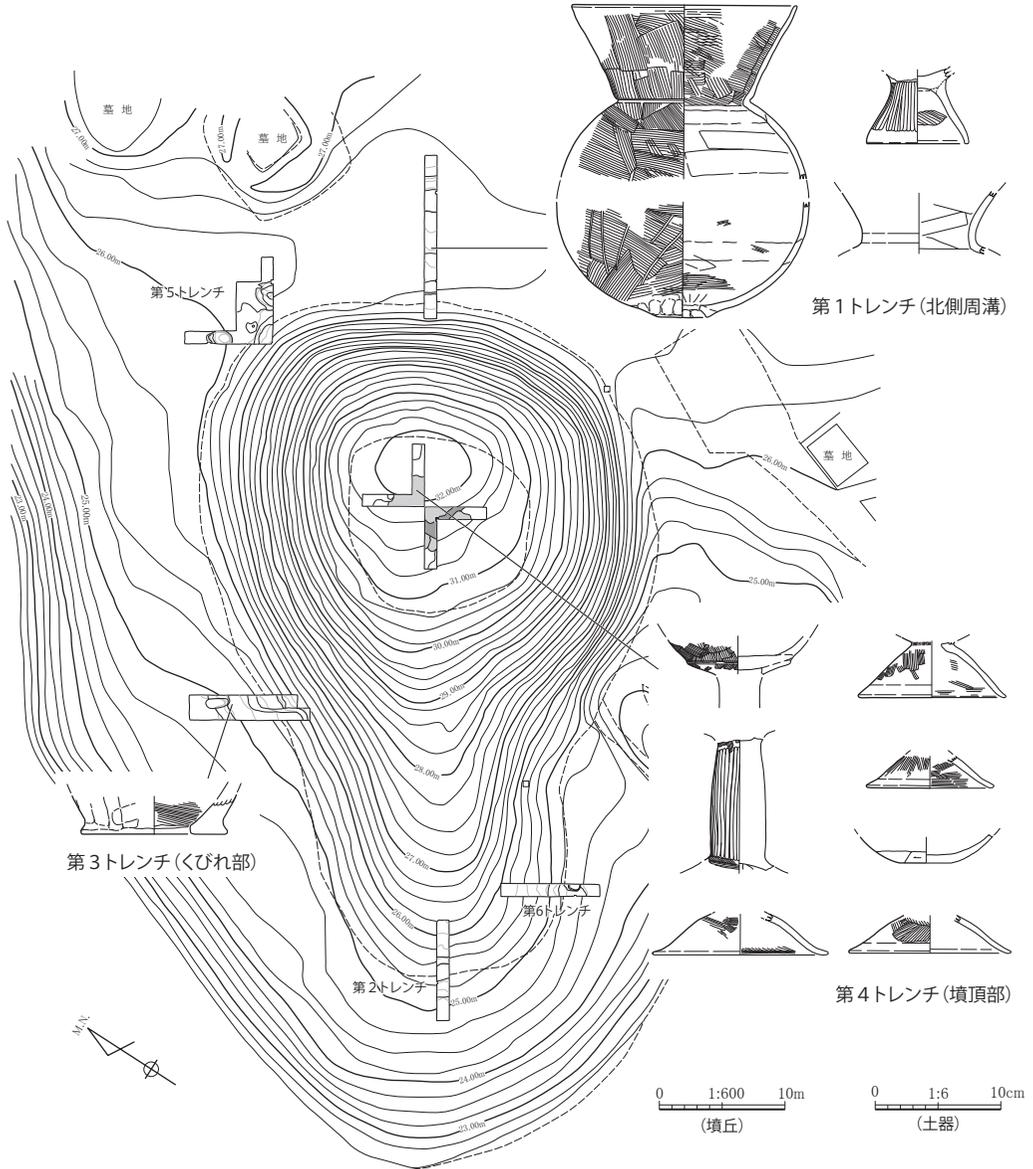


第8図 第4トレンチ平面図



- 1 黒褐色土 7.5YR 2/2 粘性弱, しまりやや弱, 植物根が多く混じる。表土。
- 2 極暗褐色土 7.5YR 2/3 粘性弱, しまりやや弱。カクラン。
- 3 黒褐色土 10YR 2/2 粘性弱, しまりやや強。漸移層か。
- 4 黒褐色土 10YR 2/2 粘性やや弱, しまりやや強, $\phi 1\text{mm}$ 程度のローム粒を多量含む。土坑覆土。
- 5 暗褐色土 7.5YR 3/3 粘性やや弱, しまりやや強。土坑覆土。
- 6 黒褐色土 10YR 2/3 粘性弱, しまりやや強, $\phi 1\text{mm}$ 程度の砂礫を少量含む。
- 7 暗褐色土 7.5YR 3/4 粘性弱, やや弱。盛土 (漸移層)。
- 8 暗褐色土 7.5YR 3/4 粘性やや弱, しまり強, $\phi 1\text{mm}$ 程度のロームブロックを少量含む。盛土。
- 9 暗褐色土 7.5YR 3/4 粘性弱, しまり強, ロームブロックを多量含む。盛土。
- 10 黒褐色土 7.5YR 3/2 粘性弱, しまり強, ロームブロックを多量含む。盛土。
- 11 暗褐色土 7.5YR 3/4 粘性弱, しまりやや強, $\phi 1\text{mm}$ 程度の砂礫をごく少量含む。
- 12 暗褐色土 7.5YR 3/4 粘性やや弱, しまり弱, $\phi 1\text{mm}$ 程度の砂礫をごく少量含む。
- 13 黒褐色土 10YR 2/3 粘性やや弱, しまりやや弱。
- 14 暗褐色土 7.5YR 3/4 粘性やや弱, しまり弱。盛土。
- 15 黒褐色土 7.5YR 2/2 粘性やや強, しまりやや弱, ロームブロック・黒色粒子を少量含む。
- 16 褐色土 10YR 4/6 粘性弱, しまりやや強。盛土。
- 17 暗褐色土 10YR 3/4 粘性弱, しまりやや強, ロームブロックをごく少量含む。盛土。
- 18 褐色土 10YR 4/6 粘性やや弱, しまり強, ロームブロックを少量含む。盛土。
- 19 暗褐色土 10YR 3/4 粘性やや弱, しまりやや強。盛土。
- 20 褐色土 10YR 4/6 粘性やや強, しまりやや強。盛土。
- 21 暗褐色土 10YR 3/4 粘性やや弱, しまりやや弱。盛土。
- 22 褐色土 10YR 4/6 粘性弱, しまり強, $\phi 2\sim 3\text{cm}$ の粘土ブロックを塊状に含む。盛土。
- 23 黒褐色土 7.5YR 3/2 粘性弱, しまり弱。砂粒を多量に含む。

第9図 第4トレンチ断面図



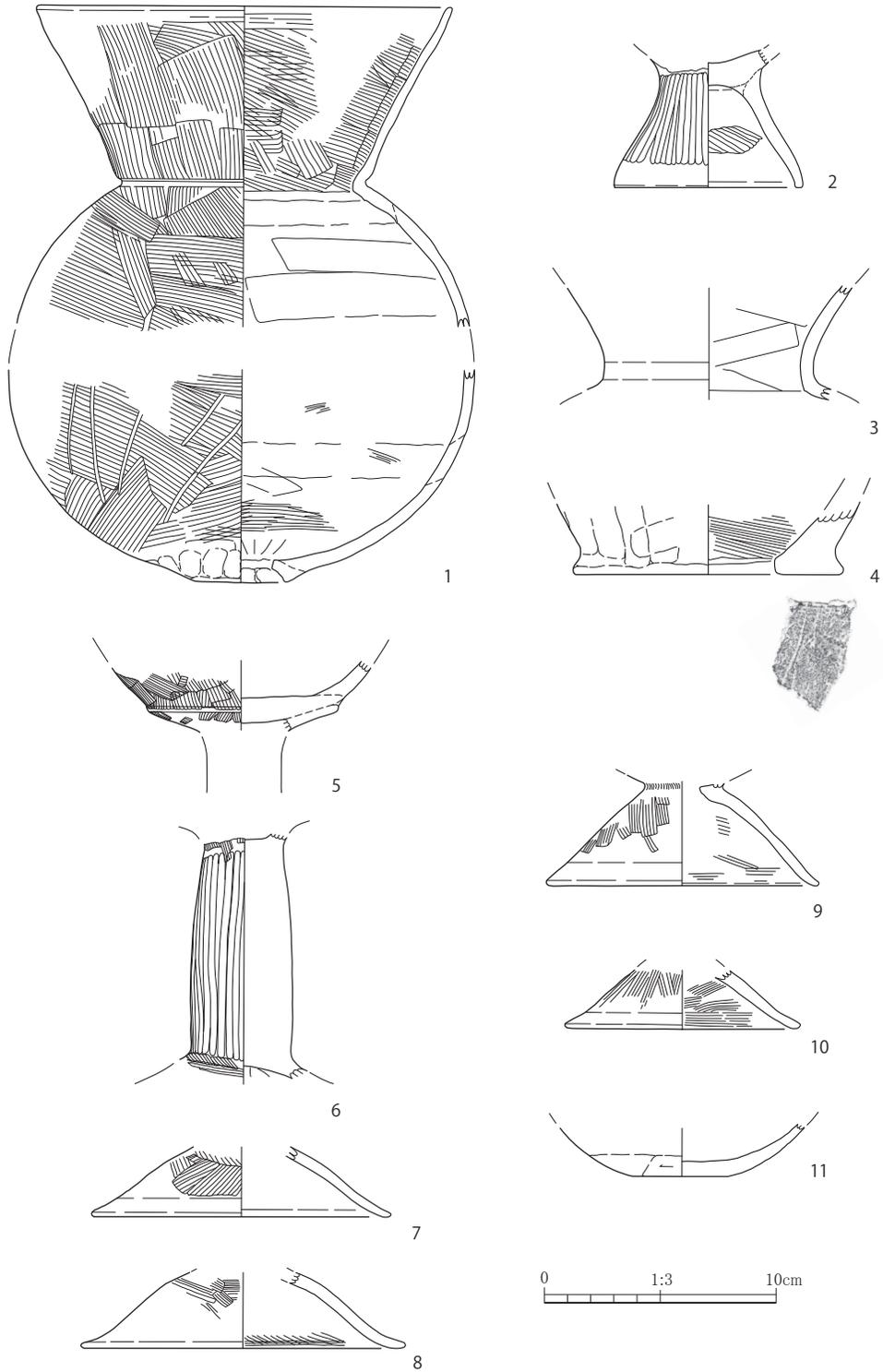
第10図 后塚古墳全体の遺物出土状況

レンチからは古墳時代の遺物と思われる土器片が計 61 点出土している。 (大村 陸)

IV. 出土遺物

1. 古墳時代の遺物

2018 年度・2019 年度の調査において各トレンチから出土した遺物は、古墳時代の土師器を主体として、縄文時代から近世までの各時代の遺物が出土している。出土したすべての土器に



第 11 図 古墳時代の出土遺物

関する詳細な記載は最終報告に譲るとして、ここでは古墳の築造年代を考えるうえで参考となる資料を中心に、11点について報告をおこなう。

1～3は第1トレンチ、古墳北側周溝下層より出土した。1は、底部に穿孔をもつ壺形土器である。口縁部から底部まで、全体の4割程度が残存する。直線的に伸びる口縁部と球形の体部をもち、底部には焼成前穿孔が施される。穿孔の直径は約3cmに復元できる。頸部は明瞭に屈曲し、頸部屈曲部外面には沈線状の痕跡が一条巡る。外面は、口縁部から底部にかけてハケメが施され、体部下半には部分的に斜め方向のミガキがみられる。内面は肩部にケズリが施され、口縁部内面と底部にはハケメが残る。2は台付甕の脚台である。外面には縦方向にヘラミガキ状の痕跡がみられる。3は、外上方へ緩やかに開く口縁をもつ壺の頸部片である。頸部内面に、横方向のナデ調整が施される。

第3トレンチから出土した4は、穿孔をもつ壺形土器の底部と考えられる。底部全体の2割程度が残存し、焼成前に施された穿孔の直径は約6cmに復元できる。底面が外方に張り出し、やや外方にひろがりながら伸びる底部の内面には横方向にハケメが巡る。

5～8は、墳頂部の第4-Aトレンチで確認された掘り込み状の範囲より出土した。5は高坏の坏部下半である。体部から口縁部へと屈曲する部分にはやや明瞭な段が認められる。外面には、屈曲部へ向かうハケメが残る。6は中実の高坏脚柱である。脚柱部の外面には縦方向のヘラミガキが、坏部および脚裾部への接合部にはハケメが確認できる。7・8は、中実の脚柱をもつ高坏の脚裾部片と考えられる。いずれも外面にはハケメが残り、脚端部はナデ調整によって仕上げられている。

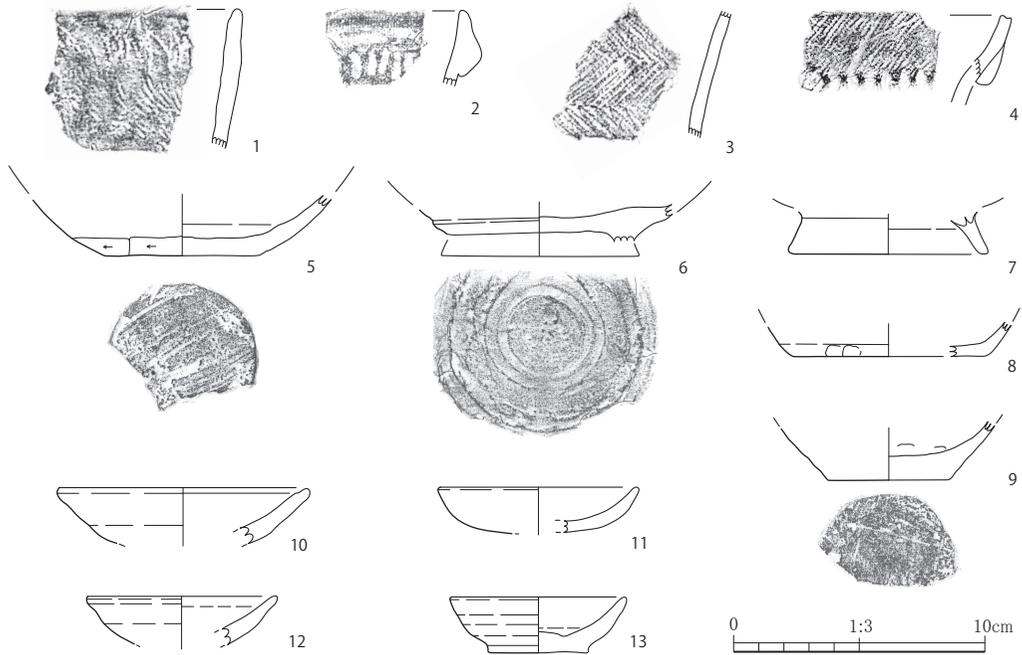
9・10は、墳頂部の第4-Bトレンチから出土した器台の脚部である。9は、脚部全体の7割程度が残存する。内外面にはハケメが残り、外面にはわずかに赤彩が認められる。脚部と同様な形状の坏部をもつ、いわゆるX字状の小型器台と考えられる。10は、脚全体の2割程度の破片であり、坏部の形状は不明である。内外面はハケメが残り、赤彩されている。11は、壺あるいは甕の底部である。横方向のケズリによって底部を整形している。

(山下優介)

2. 古墳時代以外の遺物

古墳築造以前の遺物として、縄文土器片と弥生土器片がある。縄文土器（第12図1・2）は、主に第1トレンチと第2トレンチから出土している。1は浮島式土器で、口唇部に貝殻を押し当て、鋸歯状の文様をつけている。2も浮島式土器の可能性が有る。弥生土器片（3・4）は第1トレンチからの出土である。

奈良時代以降の遺物としては、須恵器、土師器、かわらけ、陶器、瓦、五輪塔片がある。このうち第3トレンチからは須恵器1点、土師器3点が確認された。須恵器（5）は坏底部であり、体部下半は手持ちヘラケズリで調整する。9世紀後半～10世紀の所産である。土師器（6～9）



第12図 古墳時代以外の遺物

は、高台付坏の底部（6）と高台部（7）などが確認されている。いずれもおおよそ10世紀に比定される土器である。

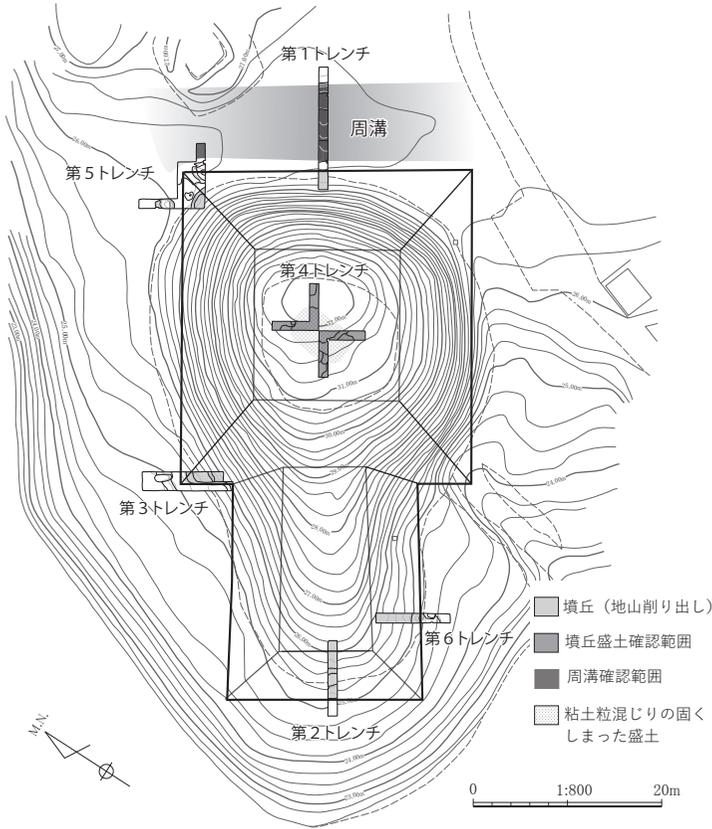
第6トレンチからはかわらけが出土している（10～13）。うち1点（13）は全体の1/3ほど残存しており、15世紀末～16世紀のものとみられる。また第6トレンチからは五輪塔片7点が出土している。すべて花崗岩製のため、風化が激しく原形を保っていないものもあるが、火輪1点、地輪3点、水輪1点を確認された。火輪の特徴から、この五輪塔は15世紀～16世紀初頭のものであると考えられる。（浅野孝利）

V. 予察

1. 墳形の復元

本調査で得られた情報をもとに、后塚古墳の墳丘の復元案を提示したい（第13図）。第1～6トレンチのうち、墳丘端部を明確に捉えることができたのは、第1・3・6トレンチであり、第2・5トレンチについてはその状況が不明瞭であった。そのため、墳丘の復元にあたっては前者の情報を優先した。

後方部については、第1トレンチで確認された墳丘端部および周溝を基準とし、その範囲と第3トレンチで認められた墳丘斜面の範囲をつないで復元した。第5トレンチの墳丘斜面の範囲と合致しないが、第5トレンチでは後世の攪乱が激しく、今回確認された墳丘は削平され



第13図 后塚古墳墳丘復元図

后塚古墳は墳丘長 56.2 m の前方後方墳に復元される。また、各部計測値は、後方部長 33.2 m、後方部幅 30.7 m、前方部長 23.0 m、前方部幅 20.3 m で、前方部は短く直線的にのびると想定される。外部施設については、後方部北側にのみ幅 8.4 m の周溝がめぐる可能性がある。

最後に墳丘の構造について触れたい。后塚古墳は基本的に、地山削り出しと盛土により構築されている。前方部の第2・6トレンチでは盛土は確認されていないため、前方部はすべて地山削り出しであったと想定される。ただし、墳頂部にあたる第4トレンチでは盛土が確認されているため、後方部の上半部は盛土によって構築されているものと思われる。なお、墳頂部においては、墳丘主軸に斜交する、粘土混じりの固くしまった盛土範囲が確認された。墳丘の他の場所ではみられない粘土が確認されていること、この範囲の北側上面から土器が出土していることふまえると、埋葬施設に関わる範囲である可能性もある。なお、今回の調査では埋葬施設に伴う明確な墓壇は確認されなかった。墓坑を有さない構築法はいわゆる「東日本の工法」の特徴とされるが(青木 2003)、これについては后塚古墳の墳丘構造についてさらなる検討を必要とすることから、今後の課題としたい。(荒井啓汰)

た後の残丘であると判断し、その外側に本来の墳端があると想定した。

前方部については、第6トレンチで墳丘端部が明瞭に確認されている。第2トレンチでは墳丘端部の位置が明確でなかったが、第6トレンチの墳丘端部の標高を鑑みて、トレンチ南端付近の傾斜変換線に墳端を求めた。また、西側の第3トレンチでは前方部に接続する部分が確認されたため、東側においてもこれを折り返した位置に前方部の接続位置を設定し、それと第6トレンチの墳丘端部をつないで復元した。

以上を総合すると、后

2. 土器類からみた古墳の築造時期について

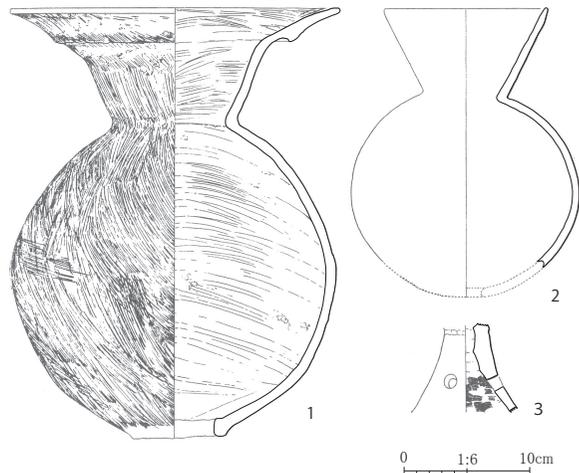
発掘調査で得られた図示可能な古墳時代の土器は11点と少なく、器形を判別できるような残存状況が良好な資料も多くない。しかし、古墳の築造時期を判断するうえで重要な資料が少数ながら確実に存在している。本節ではそれらの資料と周辺地域の古墳から出土した土器を比較検討することで、出土土器からみた后塚古墳の築造時期に関して若干の考察をおこなう。

まず、后塚古墳の築造時期を示唆する土器として、第3トレンチから出土した底部に穿孔をもつ壺形土器（第11図4）がある。この土器は、底面の縁がわずかに外方に張り出した底部から、体部がひろがりながら伸びる特徴をもつ。この底部をもとに体部を復元すると、その形状は球形よりはやや長胴形を呈すると考えられる。このような特徴をもつ土器は、行方市勅使塚古墳出土の壺形土器（大塚・小林1964、第14図）や、坂東市上出島2号墳出土の壺形埴輪（日高・田中1996、第15図）等がある¹⁾。とくに、上出島2号墳出土例は、底面の張り出しや体部の立ち上がりの形状において、第3トレンチ出土品と類似性の高い資料と言える²⁾。

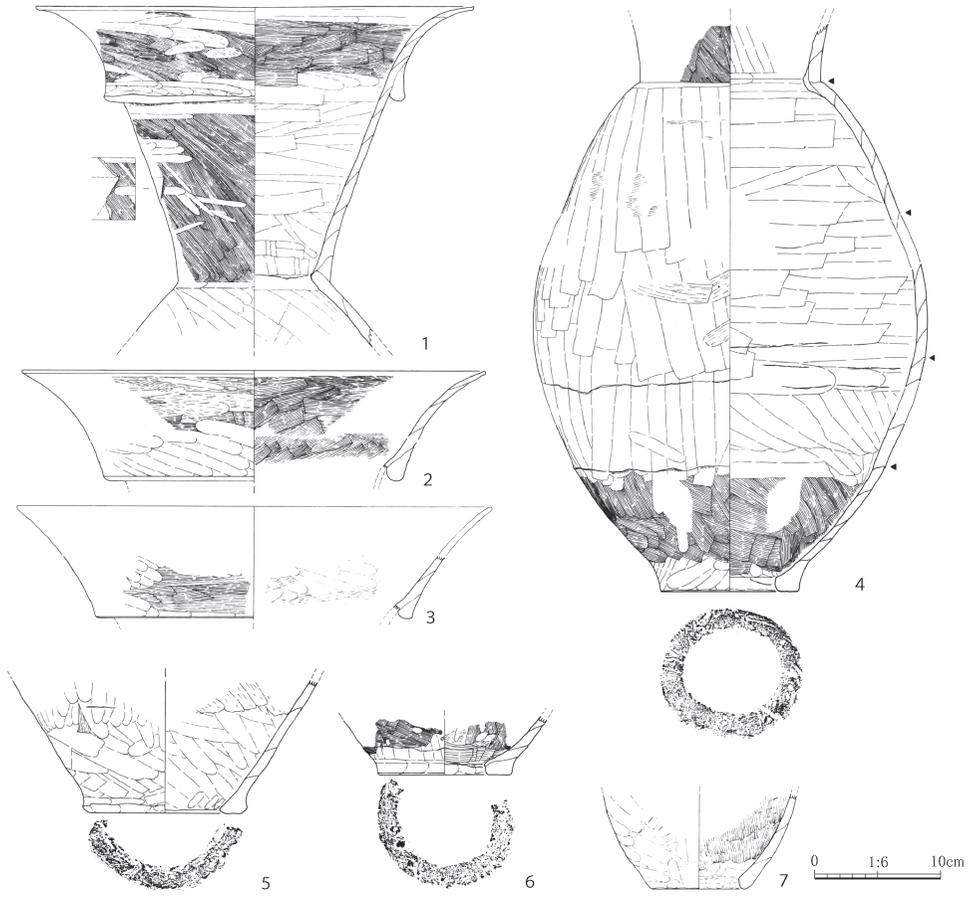
墳頂部の第4-Bトレンチから出土した2点の小型器台（第11図9・10）は、明確な遺構に伴う遺物とはいえないが、平面的には埋葬施設と理解できるため、古墳の時期を示唆する資料と判断できる。X字状の器台は古墳時代前期に通有な器種であるが、外面に施されたハケメは、古墳時代前期の精製品にはみられない特徴であり、時期がやや下る印象を受ける。もう一点の小型器台についても、脚部片のみで全形は不明だが調整等の特徴から同様な時期の土器と考えられる。一方で、墳頂部の第4-Aトレンチから出土した中実の柱状脚高坏（第11図5～8）は、上述の小型器台に比べてやや後出的な要素をもった土器と言える。

第1トレンチより出土した底部に穿孔をもつ壺形土器（第11図1）は、本古墳から出土した土器の中で最も残存状況が良好な資料であるが、周辺の古墳出土土器において普遍的な器種とはいえず、所属時期の推定が難しい。直線的に伸びる口縁部と球形の体部を有し、外面がハケメで仕上げられるこの種の壺は、千葉県市原市諏訪台古墳群SS105（北見・木對・忍澤編2015）などに類例が認められる（第16図2）。諏訪台SS105資料は破片であるために穿孔の有無は不明であるが、頸部屈曲部の外面に一条の沈線状の段が巡る点についても類似点を指摘できる。

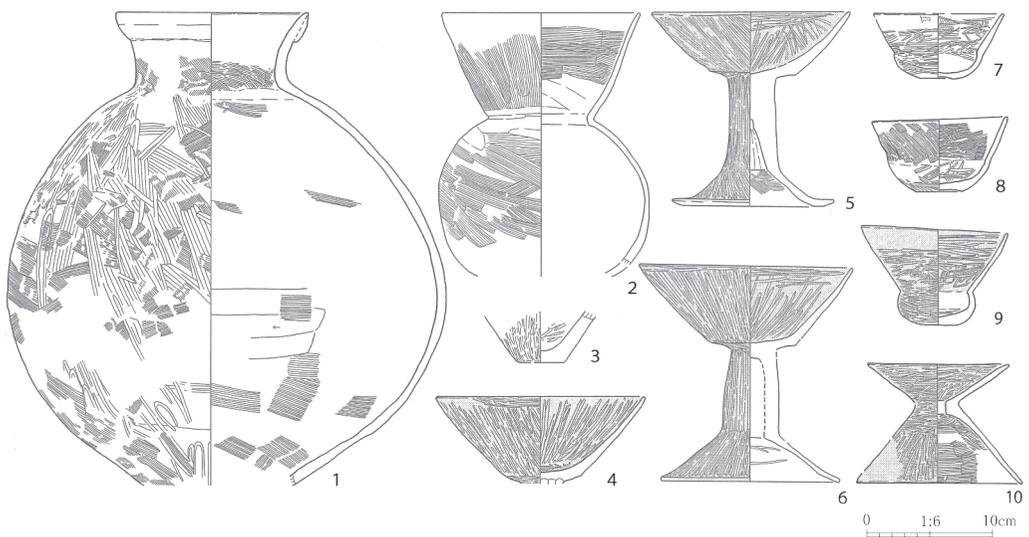
最後に、各土器に関する所見をふまえ、土器からみた后塚古墳の年代観についてまとめる。古墳が築造さ



第14図 勅使塚古墳出土土器



第15図 上出島2号墳出土壺形埴輪



第16図 諏訪台SS105出土土器

れた上限年代は、墳頂部から出土した小型器台を根拠として古墳時代前期前半のなかでも後半に近い時期と考えられる。第3トレンチで出土した壺形土器の特徴は、上出島2号墳出土資料との類似が指摘できるが、上述したように時期の断定には慎重にならざるを得ない。築造時期の下限を示す資料には中実の柱状脚高坏が挙げられるものの、その編年の位置についてはさらなる検討が必要である³⁾。

以上をふまえると、大枠としては古墳時代前期後半、柱状脚高坏が出現する茨城土器編年Ⅲ期（樫村ほか2016）に位置付けられる。その中で后塚古墳は、行方市勅使塚古墳（大塚・小林1964）などと同時期か、やや後出する可能性があるが、細かな前後関係については今後の課題である。最終的な報告に向けては、王塚古墳の調査成果をふまえてより具体的な年代的位置づけを明らかにする必要がある。（山下優介・荒井啓汰）

VI. まとめ

報告を終えるにあたり、今回の調査によって得られた成果と課題をまとめておきたい。

まず、今回の重要な成果として、発掘調査により后塚古墳の墳丘形態を確定できた点が挙げられよう。后塚古墳については、一部に前方後円墳と見る向きもあったが、主丘部側の各トレンチで把握された墳端の位置から判断して、前方後方墳であることを疑う余地はなくなった。また、前方部前端は明確に把握できなかったものの、前方部東側で確認した墳端との関係からその位置を推定することが可能となり、短く直線的に延びる前方部の形態も明らかとなった。これらの知見を総合すると、后塚古墳の墳丘長は約56mに復元される。

一方、後方部後端側のみ明瞭に確認された周溝のあり方については、検討の余地が残された。西側くびれ部の第3トレンチでは、二つの屈曲部を伴いながら前方部へとつづく墳端を確認したが、その外側には地山が急激に落ち込む状況が認められた。この落ち込みは、くびれ部付近にめぐる周溝の可能性が考えられたものの、後方部北西側の隅角部では、明確に周溝と言えるような落ち込みは確認できなかった。これらの事実から推測すると、后塚古墳の周溝は墳丘の周囲に連続的にめぐるものではなく、部分的に掘られている可能性がある。この点の解明は、今後の追加的な調査に俟つほかはないが、後方部の上半部にのみ盛土をおこなっているとみられる墳丘構造の特徴も、周溝の掘削範囲を念頭に置いて検討する必要がありそうである。

埋葬施設については、その位置と範囲を確認するための調査を実施したが、明確な墓壇の存在を認めることはできなかった。ただし、墳頂の中心部で現地表下約65cmの位置に確認された「粘土混じりの固くしまった盛土範囲」は、埋葬施設の構造にかかわる可能性が高い。この盛土範囲は、南北約4.5m、東西約3.5mの長形状を呈し、その長軸方向は墳丘の主軸方向から約45度傾き、ほぼ南北方向となっている点が注目される。

茨城県域における前期古墳の埋葬頭位については、北優位であることが以前から指摘されている（岩崎1983）。また、東日本全体における前期古墳（前方後円墳、前方後方墳）の墳丘主軸と埋葬施設主軸の関係は、平行または直交が一般的である（小林1989）。じつは、后塚古墳

の墳丘主軸はほぼN-232°-Eをとるため（石田ほか2018）、発掘調査の前から、当地域における埋葬頭位の北優位傾向か、墳丘主軸と埋葬施設主軸における平行・直交関係のいずれかが順守されていない可能性が浮上していた。今回墳頂部で確認された特徴的な盛土範囲が埋葬施設の方向性のある程度反映しているとするならば、后塚古墳の埋葬施設は斜交埋葬施設となる可能性が高く、そこには埋葬頭位のみを重視したやや特異な前期古墳の設計が想定されることになる（滝沢2012）。確たる証拠が得られていない現状での議論には限界があるが、今後后塚古墳の性格を解明していくうえで留意すべき点であろう。

后塚古墳の築造年代にかかわる出土遺物が得られた点も、今回の調査の大きな成果である。後方部後端側の第1トレンチでは、ある程度全形が復元できる直口縁の底部穿孔壺が出土し、くびれ部の第3トレンチからは、焼成前底部穿孔を伴う壺形土器の破片が出土した。また、墳頂部からは、本古墳の埋葬儀礼に伴うとみられる小型器台や高坏などの土器が出土した。これらの土器のうち、墳頂部出土の小型器台は古墳時代前期前半に遡り得る特徴を示す一方、同じく墳頂部で出土した中実の脚柱部を有する屈折脚の高坏には、大枠で前期後半の位置づけが与えられる。また、くびれ部で出土した底部穿孔壺の小片は、本古墳への帰属に一抹の不安を残すものの、その形態は前期後葉の特徴を備えている。

このように、今回の調査で出土した土器にはやや年代の幅が想定されるため、今後細片を含めた出土土器の整理を進める中で、各器種の編年的位置を慎重に見極めていく必要がある。したがって性急な結論は避けなければならないが、ひとまず墳頂部出土の土器を重視するならば、后塚古墳の築造年代は、各器種に想定される年代幅が交差する、古墳時代前期後半の中でもそれほど遅くならない時期に求められよう。

后塚古墳で初となる今回の発掘調査では、以上のような多くの成果を得ることができた。その一方で、后塚古墳の墳丘構造や埋葬施設、築造年代をめぐるあらたな問題状況もみえてきた。今後予定されている王塚古墳の調査成果もふまえて、霞ヶ浦・土浦入りの最奥部にいち早く拠点を築いたとみられる古墳時代首長勢力の実態解明を引きつづき進めていきたい。

（滝沢 誠）

謝辞

后塚古墳の発掘調査に際しては、地権者である入江善一氏、大久保清氏にご快諾をいただくとともに、手野町区長の小野 豊氏、薬王寺にご協力を賜りました。また、調査の実施にあたっては、地元の上大津公民館にご協力をいただき、本報告の執筆にあたっては、以下の方々からご指導、ご助言を賜りました。関係各位にあらためて御礼を申し上げます。

石田温美、亀井 翼、黒澤春彦、塩谷 修、田中 裕、比毛君男、茂木雅博、谷仲俊雄（五十音順、敬称略）

註

- 1) 塩谷修は、壺形埴輪の定義について以下のように述べる。①底部に焼成前の穿孔を有する。②頸部から屈曲して外反する有段口縁、二重口縁を有する。③同一古墳における同一規格をつよく意識して製作されている。④墳丘上、墳丘裾部に配列される。⑤あるいは、樹立・配列された器台形円筒埴輪や円筒埴輪と結合する(塩谷 2014)。塩谷の定義をふまえ本稿では、底部に焼成前の穿孔をもつ壺形土器であっても、それが同一規格を意識して複数個体つくられたか、あるいは複数が列をなして古墳に配置されたかという視点によって、壺形土器と壺形埴輪の呼称を使い分けた。すなわち、古墳から単独で出土した資料については壺形埴輪と呼ばず、底部に穿孔をもつ壺形土器とする。
- 2) ただし、同じ層位やその周辺から同様の壺形土器は確認できなかった状況をふまえると、複数個体配置されるような壺形埴輪であるとするにはやや慎重にならざるを得ない。
- 3) 茨城県小美玉市竹原小学校遺跡では、初期の埴輪とともに中実の柱状脚高坏が出土している(井 2010)。埴輪の形態的特徴は小美玉市羽黒古墳例と類似する。

参考文献

- 青木 敬 2003 『古墳築造の研究—墳丘からみた古墳の地域性—』 六一書房。
- 井 博幸 2010 「竹原小学校遺跡出土の古墳時代前期の埴輪と土師器」『小美玉市史料館報』Vol.4 99-114 頁。
- 石田温美・齊木 誠・荒井啓汰 2018 「土浦市后塚古墳の測量調査」『筑波大学先史学・考古学研究』第 29 号 69-83 頁。
- 岩崎卓也 1983 「古墳時代の信仰」『季刊考古学』第 2 号 雄山閣 29-31 頁。
- 大塚初重・小林三郎 1964 「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊』第 2 巻第 3 号 103-122 頁。
- 樫村宣行・小澤重雄・土生朗治・稲田健一・石橋 充・石丸敦史・本田信之・谷仲俊雄・大久保隆史 2016 「弥生土器から土師器へ—土器からみた地域間交流—」『考古学からみる茨城の交易・交流』茨城県考古学協会 52-75 頁。
- 北見一弘・木對和紀・忍澤成規編 2015 『市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡Ⅱ 上総国分寺台遺跡調査報告 XXVI』市原市教育委員会埋蔵文化財調査センター。
- 小林隆幸 1989 「前期古墳の埋葬頭位」『保内山王山古墳群』三条市教育委員会 126-129 頁。
- 塩谷 修 2014 「壺形埴輪の性格と歴史的意義」『前方後円墳の築造と儀礼』同成社 75-96 頁。
- 滝沢 誠 2012 「東日本における古墳時代の斜交埋葬施設」『筑波大学先史学・考古学研究』第 23 号 1～20 頁。
- 滝沢 誠 2017 「霞ヶ浦沿岸の前期前方後円墳—土浦市王塚古墳の測量調査—」『筑波大学先史学・考古学研究』第 28 号 77-94 頁。
- 土浦市史編さん委員会編 1975 『土浦市史』土浦市。
- 日高 慎 1998 「茨城県 前期古墳から中期古墳へ」第 3 回東北・関東前方後円墳研究会大会実行委員会編『〈シンポジウム〉前期古墳から中期古墳へ』東北・関東前方後円墳研究会 105-122 頁。
- 日高 慎・田中 裕 1996 「上出島 2 号墳出土遺物の再検討」『岩井市の遺跡Ⅱ』岩井市史編さん委員会 114-134 頁。
- 茂木雅博ほか 1984 『土浦の遺跡—埋蔵文化財包蔵地—』土浦市教育委員会。
- 茂木雅博・水野佳代子・長洲順子 1991 「土浦市における古墳の測量」『博古研究』創刊号 49-60 頁。
- 柴 正・中根節男 1987 『霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団。

図版出典

第1図 滝沢 2017 を一部改変

第2～13図 筆者作成

第14図 大塚・小林 1964 を一部改変

第15図 日高・田中 1996

第16図 北見・木對・忍澤編 2015

滝沢 誠（筑波大学准教授）

山下優介（東京大学大学院）

荒井啓汰（筑波大学大学院）

大村 陸（筑波大学大学院）

大沼柊平（筑波大学大学院）

浅野孝利（筑波大学学生）